

編 集 後 記

今年の元旦、いくつかのテーマに分けて、その分野の専門家に話を聞くテレビ番組があった。たまたまテレビをつけたらノーベル賞医学・生理学賞受賞者の利根川博士の対話だった。何ごとにつけ目標をしっかり持つことが大切であり、その目標に向かって努力することが充実した生き方に通じる、というお話であった。目新しい内容ではないが、何故か心に残る、説得力のあるお話であった。いろんな目標があろうが、目標は大きければ大きいほど達成したときの満足感は大きいし、それに向かって努力している姿は美しい。研究は臨床研究にせよ基礎研究にせよ研究テーマという大きな目標に向かって進むわけであるから、科学を志す者はつねに研究テーマを持っていることが大切であり、このことが充実した日々を送る原動力にもなるであろう。そして研究目標が達成されれば、その成果を論文にまとめることも大切な目標である。私は編集委員を拝命して多くの原著論文の査読をするという機会を与えられたが、目標意識の高い、しっかりした研究の原著論文に何篇か出会うことができた。「文は人なり」という言葉のとおり、文章からその著者の誠実さが伝わってくるものである。日常の診療に埋没してしまいそうな日々を送って居る私であるが、つねに研究目標を持ち、しっかりした原著論文がかけられるよういつまでも心に留めて置きたいものである。本学会誌もこのところ論文投稿が増え、今月号は原著5篇、症例報告12篇が掲載されている。大変喜ばしいことである。

さて、今月は深緑の美しい6月、事務局の窓から見える千鳥が淵の桜も緑が美しい。時の経つのは早いもので私はまもなく、この7月で編集委員6年間の定年を迎える。長くもあり、短くもあったような6年間であった。この間、査読をとおしていろいろと勉強をさせて頂いた。会員の諸氏、編集委員長はじめ編集委員各位、そして事務局の皆様には深甚なる謝意を表したい。今後は、一投稿者として本学会誌に貢献できることを新たな目標にしたいものである。

(鶴丸 昌彦)